

「一緒にしないで」 閉上住民が語る「被災者」という言葉の重さ

人文社会学群人文社会学類4年 坂上

東日本大震災から15年。今でも、名取市閉上に暮らす住民にとって「被災者」という言葉には複雑な思いがある。ほかの地域や人と「一緒にしないでほしい」という強い言葉を私は取材で聞いた。見えたことは、震災のデータや報道の記事だけでは伝わらない、今の日常にまで影を引く複雑な感情だ。閉上で出会った住民の声を通して、被災者という言葉がどのようなものなのか、考えてみた。

あの日に閉上で起きたこと

2011年3月11日午後2時46分、東日本大震災は東北の太平洋沿岸を中心に、いまだかつてない揺れと津波を起こした。名取市閉上でも大地震からおよそ1時間後に津波が押し寄せ、住宅や道路などの日常の風景が一瞬で失われ、750人余りの命が奪われた。多くの住民が避難所での生活を余儀なくされ、不安と混乱の中で過ごすことになった。

あの日から15年たった現在、新しい町並みが整備されて、閉上は生まれ変わったように見える。しかし、震災の記憶は過去のものとして終わったわけではない。住民の暮らしや心には、今でも震災の記憶が生き続けている。

こうした経験や記憶の中には、「被災者」という言葉で語られることへの複雑な思いも含まれている。これは簡単に説明できないものであり、震災自体をどう受け止め、どのように生きてきたか—など、その人の歩んできた生活に深くかかわっている。

ひとくりにされることに違和感

「一緒にしないでほしい」。その言葉を聞いたのは、授業のインタビューで閉上の人々を集会所に訪ねた昨年10月。私は驚きを隠せなかった。それまでは、被災した住民が同じ経験を共有してお互いに支えあってきた印象があったからである。そのため、この言葉は意外だったと同時に私の心に重く響いた。

話を伺ううちに、それが決して他の被災者を否定するものではないことが分かってきた。「被災者」とひとくりにされることで、あの日から積み重ねてきた時間、それぞれに違う苦難の体験や事情が一色に塗りこめられてしまうことへの戸惑い、違和感が見えてきた。私が向き合った樋口きいさん(68)の言葉には、怒りよりも、理解し知ってほしいという強い願いが込められているようだった。

「被災者」という言葉は、震災の現地の当事者を指すだけでなく、震災から15年たった今でも住民の心の奥に残る思いが含まれている。そこにこもる感情が、見た目の「復興」が進んだような現在の暮らしの中に残り続けていることを強く感じさせた。

自分たちだけが「特別」ではない

「一緒にしないでほしい」という言葉には、自分たちだけが特別なのではない、という思いも込められていた。被災の大きさや苦しみは、人や地域によっても違い、身内や親しい人々の生死も伴い、「もっと大変な思いをした人がいる」と樋口さんは語っていた。自分たちだけがクローズアップされ、特別扱いの「被災者」とされることに違和感を覚えている。これまで多くの支援を受けてきた中で、申し訳なさや居心地の悪さを感じることもあったのではないだろうか。

震災直後、全国からの支援が閑上にも寄せられた。生活物資や食べ物、ボランティアの手助けは、家や暮らしを失ってつらい状況の中で大きな支えになったことは確かだろう。しかし、樋口さんは「物の支援をいただき、手を貸してくれる人たちがいることに慣れてしまっていた」と語った。支援される側という立場が長く続くことで、自分たちで考え、動く力が弱まってしまったのではないか—という思いだった。

このような感情は支援そのものを否定しているのではなく、「支援があったから前に進めた」という実感があるからこそ、複雑になっているのではないかと感じた。支援を受ける側としての感謝の面と、主体的に生きていきたいという感情の間に生まれた複雑な葛藤をも、「被災者」という言葉は投げ掛けるのだと思う。

一人一人の言葉から「終わらぬ震災」を学ぶ

取材を通して感じたのは、メディアが、また私たちがよく用いる「被災者」という言葉の便利さと難しさであった。一つの言葉によって状況やイメージは伝えられる一方で、背景にある一人一人の体験や思い、震災後の人や地域の歩みは同じものではない。樋口さんが語った「一緒にしないでほしい」という言葉は、他の誰かを否定するものではなく、目の前の自分たちの声や歩みを知ってほしいという願いであるように感じた。

震災から 15 年たった今でも、「被災者」という言葉は過去の震災を指すだけのものではなく、それからの暮らしや人との関わり方、人生にまで影響を与え続けている。この言葉を無造作に聞き、読み、使うのではなく、どう受け止め、どのように用いたらよいか、一度考えてみてほしい。そして、言葉の奥にある一人一人の体験に耳を傾けていくことが、震災とは過去でなく、今も終わらぬものであると学び続ける上で重要なことではないだろうか。

閑上の被災者の心に騒る、早すぎた「復興達成宣言」

人文社会学群人文社会学類4年 山本

15 年前の東日本大震災から続いた被災地の復興事業が、名取市閑上では9年後の 20 年、市長の「復興達成」宣言で一区切りを迎えた。しかし、長く地域を見守ってきた住民の胸には今、故郷の姿が変わっていく喪失の思い、かつての暮らしと仲間を取り戻すことはできない寂しさが残るという。「復興」とは何なのか。被災地となった閑上の過去と現在を見つめてきた閑上中央町内会長の長沼俊幸さん(63)に聴いた。

被災者と行政にすれ違い

2011 年 3 月 11 日、マグニチュード 9 を記録した大地震は、東北の太平洋沿岸に未曾有の津波被災を生み、閑上では 750 名以上の住民が亡くなった。長沼さんは津波襲来時、奥さんと自宅の屋根上になり、家ごと3キロも流されて救助されたという。

その後の避難所生活は、「家族ごとの仕切りがないために、絶えず見られているようでストレスが募り、プライベートが存在しないのが過酷でつらかった」と語る。ニュースなどでよく目にする段ボールの仕切りが入ったのは 5 月末だった。別の避難所にはあったのを仲間が偶然目にし、長沼さんらは怒って世話役の市役所職員に交渉し、ようやく設置されたという。

人事異動があると、避難者個々の体調や、生活で必要な情報が隅々まで引き継がれず、食事も支援物資のパンなど連日変わらないものになり、極限状態のつらさが募った。行方不明の身内を探す人、家族を失った人も同じ避難所において大変だとは言いづらく、我慢を強いられる環境において「人はストレスから攻撃的になった」という。

仮設住宅の生活も6年間続き、それからの生活再建の情報を集める余裕もなく、閉上を現地に再建するか、内陸に移転するかの問題など、行政と住民の対話が足りないと感じたという。誰もが経験のない極限の状況で、被災者と行政にはすれ違いが起き始めていた。

表面の「復興」に募る寂しさ

街をすべて流された閉上について、名取市はその古い歴史を鑑み「現地再建」の方針を掲げた。しかし、津波で家族を亡くした人、悲惨な体験から内陸移転を望む人、家を再建する余力がない人など、「閉上に戻れない、戻らない」選択をした人は意向調査のたびに増え、閉上に帰還した住民はわずか4分の1ほどだった。閉上の海沿いは災害危険区域に指定され、ふるさと閉上が元通りになることはなくなった。

「復興って何だと思えますか?」。私は昨年、授業で向き合った長沼さんの問いに、誰もが納得するであろう答えを見つけることができなかった。「閉上で共に暮らした人たちと、場所が変わったとしても、どこかでまた新しい生活が始めれば、それが復興だと思っていた。自分の考えていた復興はなくなった」。そう語る長沼さんからは寂寥感が漂った。行政が掲げた現地再建という方針と、住民の多くが願った集団移転という「新たな閉上」の夢は根本から違っていた。

地盤の大規模なかさ上げ、広い避難道路の整備と新たな住宅地造成、小中一貫校の新設、商業・観光の大きな施設など、現地再建された閉上の新しい街並みは見違えるようだ。「震災後に人が増えた場所は被災地として珍しく、とても良いことだが、昔ながらのなつかしい暮らしが消えたことに寂しさがある」と長沼さんは言う。

同じ被災者として住民たちが支え合った6年間の仮設住宅暮らし。その大切なコミュニティも、現地再建をめぐる選択の違いから離れ離れになった。綺麗な街並みになり、若い移住者も増えた閉上は、表面的には「復興した」と見えるかもしれない。しかし実際には、失われたふるさとを求めた人々の「心」は取り残された。閉上の未来への道筋は遠くすれ違ったまま、20年3月30日、山田司郎名取市長による「復興達成宣言」が行われた。

被災者・遺族の心、これからの閉上

「家族を津波で亡くして、それから一度も閉上に来たことがない同級生がいる。年に一度は電話をしているんだ。心に傷を負ったままの人は多い。負担にならぬよう気に掛けて忘れていけないことが大切だ」と長沼さんは言う。人それぞれに生きる選択や考えは違っても、同じ被災の傷みを背負って15年を生きてきた。

長沼さんは、家族を亡くした人でも、年月が経って話したい人もいるのではと考える。「無理に深追いする必要はないが、家族のことを話すことで、思い出すことができる。亡くなった人も、閉上に戻れない人のことも、忘れないこと、気に掛けていることが大切だ」。その思いやりある言葉から、人の繋がりを何よりも大切にしたい閉上の温かさを垣間見た気がした。

「今の閉上でも、新しく来た人たちと繋がる機会を作りたい。朝に顔を合わせれば話しかけ、親子で参加しやすい祭りも始めた。無理のない範囲で、新しい住民にも過去の閉上を知ってもらいたい」

過去を知り、いつかの未来を変える

閑上を襲った津波は、東日本大震災が初めてではない。昭和 8(1933)年に起きた昭和三陸地震の津波の記憶は、石碑によって閑上に残されている。長沼さんが小さい頃から遊んだ日和山公園に『地震があったら津波に用心』と刻まれた石碑が建てられたが、後世の住民への伝承は忘れられた。長沼さんの昭和7年生まれの子供は「閑上には津波が来ない」と語っていたという。「(津波から)牡鹿半島が守ってくれる」とも。遡れば、その上の世代から津波の伝承は途切れていた。閑上の人々は津波とは何かを知らぬまま「あの日」を迎えた。

大きな地震に留まらず、豪雨や台風などの大災害は毎年、日本のどこかで起きている。長沼さんは「過去を知ることで備えることができる。そして、いつもと違うと思ったらまず逃げる、命があれば何とかする」と教えてくれた。過去の閑上の暮らしも、それを奪った津波のことも知り、明日に伝えつなげようとする姿勢があれば、いつかの未来を大きく変えられると感じられた。

(現 在 も 静 か に 佇 む 日 和 山 = 2025 年 10 月 26 日)



閑上の被災者が語る、「復興」する街の寂しさ

人文社会学群人文社会学類4年 青柳

昨年10月、大学の授業の現地取材で名取市閑上を訪れた。2011年3月11日の東日本大震災の津波で被災した住民の一人、閑上中央町内会長の長沼俊幸さん(63)をはじめ住民の皆さんから、被災当時の状況や、その後の避難生活、閑上への帰還、現在の暮らしについて聞いた。そこで被災者が抱く違和感や葛藤に耳を傾け、「復興」とは何かを考えた。

「ふるさとの面影がなくなった」

閑上の街は、15年前の津波ですべてを流された。津波は最大で流速8メートル毎秒、浸水深は3.7メートル(閑上公民館付近)に達し、750人余りの命を奪った。名取市内の犠牲者のおよそ8割に当たり、

震災前の地区人口のおよそ7人に1人が帰らぬ人となった。

あれから15年が経ち、閑上では新しい街づくりが着実に進められてきた。整然とした住宅地が広がり、観光施設の「かわまちてらす閑上」やゆりあげ朝市、大型生鮮食料品店、閑上小学・中学一貫校、閑上公民館なども整備された。震災前からの唯一の遺構である日和山を除けば、すべてが失われた「被災地」の姿は消えている。外からの目で見れば、閑上は「『復興』の事業が順調に進んだ街」の一つに映るだろう。

だが、そんな変化に戸惑いを覚えている住民も少なくない。「『復興』が進んでいるというのは分かるけど、なんだか違うんだよね」。そんな言葉が、閑上中央集会所での住民インタビューで聞かれた。まず多く挙げたのは「ふるさととの面影がなくなった」という声だった。名取市による「現地再建」事業で新しい街の整備が進められ、震災前とは大きく姿を変えた。古い歴史ある漁港でにぎわった街の暮らしと風景は残っていない。

新しい街から置き去りにされるもの

「やっと生まれ育った故郷に戻ってこられたと思ったのに、帰ってきたら、まるで別の街みたいだった」。そう語る長沼さんは、今の閑上の街にモダンな暮らしやすさがある一方で、心の拠り所だった「閑上らしさ」を失ってしまった寂しさを抱えているという。

「『復興』が進むにつれて、人とのつながりが薄くなっていった」という声もインタビューで聞かれた。震災後およそ6年間住んだ仮設住宅で、閑上から避難した住民たちの生活は楽なものではなかった。しかし、狭い環境で住民同士が自然と助け合い、声を掛け支え合う関係が育まれていったという。「お茶会」や「カラオケ大会」など、誰もが気軽に参加できる行事が頻繁に開かれ、孤独を感じやすい状況だからこそ人と人との関係は近かった。

住民たちはそれぞれの生きる選択で再び離散し、閑上へ帰還した人たちの関係も再び薄れていった。新たに発足した閑上中央町内会が集まりに参加を呼び掛けても、災害公営住宅の部屋にこもりがちな年配者もいる。ここでも毎月お茶会を催したり、新住民の若い親子が参加しやすい祭りを企画したり、長沼さんらの模索はまだ途上にある。

閑上には前向きな変化も確かにある。仙台近郊の暮らしやすい環境や小中一貫校の開校を背景に、子育て世代を中心とした移住が進み、現在では新住民が地域全体のおよそ3分の1を占めている。かわまちてらす閑上を拠点に、観光やビジネスの可能性を見出す人もいる。「まっさらな土地から挑戦できる場所」になったのも事実だ。しかし、そんな新しい街づくりが進めば進むほど、「かつての景色や人とのつながりが失われていく」寂しさを抱えて被災者が置き去りにされていくような、重く矛盾した現実もある。

「復興」の模索は終わっていない

「復興」とは、失われた建物や街を建て直すことだけを指すのだろうか。長沼さんの話に耳を傾ける中で浮かび上がったのは、「過去を懐かしめる場所」や「人が集い、語り合える居場所」が必要であるという思いだ。長い時間をかけて築かれてきた人と人との関係や記憶は、一朝一夕に、あるいは人工的に作り直せるものではない。

生まれ育った場所に戻ることができても、そこが以前とは異なる風景や空気をまとった街であるならば、「復興」はまだ道半ばなのかもしれない。「復興」とは、目に見える形を整えることだけではなく、そこで生き

る人々が「ここに帰ってきてよかった」「また共に生きていける」と安堵を感じられる場や関係を育てていくことではないだろうか。

震災から15年を迎えた閑上の姿は、私たちに「復興とは何か」を問い掛けている。

閑上の被災者が問う、「復興」という言葉の意味

健康栄養学群健康栄養学類4年 北條

「復興の意味とは何ですか?」。私にそう質問したのは、2011年3月11日の東日本大震災の津波で被災し、現在は名取市の閑上中央町内会長を務める長沼俊幸さん(63)だった。私はその時、曖昧な答えしか返せなかった。昨年10月の授業の取材で、長沼さんは復興という言葉への思い、市の閑上「現地再建」方針を受け入れられず離散した住民への思いを語ってくれた。「閑上の復興は順調に進んだ」と報道されてきたが、当事者の人々はどう思っているだろう。長沼さんは「復興の意味を、今まで答えてくれた人は誰もいない」と語る。閑上の現状やこれまでの道のりに触れながら、本当の意味を自分なりに考えたい。

取材に訪ねて逆に受けた質問

閑上中央集会所での住民の取材に訪れた私は、長沼さんから「復興の意味とは何ですか?」と逆に質問された。私は、それまで「復興というのは、災害で住めなくなってしまった街や建物を再建し、もう一度暮らせるようになることである」と考えていた。誰もが普通に思っているイメージではないか。

現在の閑上は、新しい住宅や建物、商業施設が立ち並び、海辺の観光地として賑わいを見せている。その様子を見れば、閑上の「復興」は進んでいると感じる。しかし、震災前の閑上に住んでいた住民の帰還は少ないという。長沼さんは避難先から閑上に戻って家を再建したが、「震災前のような街の雰囲気や姿、人のつながりは戻ってこない」と語る。

私はその言葉に大きなショックを受けた。被災者である長沼さんは現在の閑上の姿に「復興」を感じていないのに、当事者でない私が言葉の意味を安易に解釈し、閑上はもう復興したと外観で決めつけていた。そのことに私は、自らの浅はかさを痛感した。

「復興」—この言葉の意味は何なのか、考えていきたい。

復興という言葉はどこから

東日本大震災の後、誰もが聞いたことがあろう「復興」という言葉は、どのような意味で、いつから使われてきているのだろう。

広辞苑では「ふたたび盛んになること」と定義されている。まさに被災前より「プラス」の状態をつくり出していく営みだといえる。これとは別に「復旧」という言葉があり、元に戻ることを意味する。おそらく復興を、復旧の意味で認識している人は多いと思う。これに照らせば、閑上の街は家々や建物が新築され、人が住める場所としては復旧はしたが、復興はしていないのではないか。大規模な災害現場においては、辞書のように簡単に復興を定義することなどできないからだ。

歴史を紐解くと、復興という言葉が使われ始めたのは、1923年の関東大地震の後といわれている。当

時の定義として、帝都・東京をより近代的で災害に強い大規模な都市へと改造する「復興」が目指された。この例に当てはめると、閑上の街も、土地の嵩上げや津波の多重防御、避難道路の整備も行われ、以前より安全な街とされた現在、国や行政の視点では「復興した」と考えられるだろう。しかし、震災前からの住民である長沼さんの思いや、共に暮らしていた人々の思いを考えると、どうなのだろうか。

新しい街の風景に暮る「寂しさ」

長沼さんが考える「復興」とは、「震災前の閑上で暮らした仲間たちともう一度、一緒に生活を送ってみたい、場所はどこでもいいから」というものだった。実際に長沼さんは避難先の仮設住宅で、同郷の仲間たちと内陸の安全な土地に移って、また一緒に暮らすことを願っていた。しかし、市は閑上の街の「現地再建」方針を推し進め、津波の恐ろしさを体験した多くの住民が離れていったという。

大規模な嵩上げで再造成された閑上に家を再建し、帰還した長沼さんは真新しい街の風景に、年を追って「寂しさ」を覚えるようになったという。「同じ場所に住んでいるはずなのに、どこか知らない街のようで、もう自分の思い描いたような復興はない、震災前の閑上は戻ってこないのだ」と気づいたという。「復興はもうない」。長沼さんの口からでたこの言葉は、私たちが想像できないほどに重く、やるせない気持ちを強く響かせた。

震災前のふるさととは「うざい街」

伊達政宗の時代から豊かな漁港だった閑上。この地で生まれ育った長沼さんによれば、「良いことも悪いこともすぐ伝わってしまうような、住民同士の距離の近さが持ち味の『うざい街』だった」。自宅に鍵をかけず外出する習慣があり、朝寝をしても玄関から近所の人が入ってくる。漁のおすそ分けを留守宅の冷蔵庫に入れていく。そんな昔ながらのつながりや互いへの信頼も厚かった故に、安心して暮らせる場所。それが「うざい町」と愛着を込めて表現された。

そんなのどかなふるさとの街は2011年3月11日の東日本大震災の津波で失われた。その後、長沼さんは避難所や仮設住宅での生活を経て、現地に再建された閑上に戻った時、街は6階建ての復興アパート(災害公営住宅)が立ち並ぶモダンな街に変わっていた。

「閑上らしさ」の価値観の不一致

閑上の災害公営住宅(6階建て)は、名取市が発注者になり、事業委託の民間建設コンサルタント企業を介して建設された。名取市は「『閑上らしさ』を感じられる街並み空間の形成」を謳ったが、町内会長になった長沼さんの目には「行政は住民の気持ちに寄り添えていない」と映った。災害公営住宅の入居者は、「機会の公平性」を優先した市が、もともと住んでいた住民かどうかは関係なく「くじ引き」で決めた。同じ仮設住宅で6年間も暮らした住民たちの多くは、見ず知らずの人たちと隣り合うことになった。

若い世代の住民との交流を広げることができれば、地域のコミュニティーの再生も見込め、震災前の閑上のような絆を培える可能性はあった。が、それには時間が掛かり、昔から積み重ねてきた関係の土台も半ば崩れてしまっている。出身も違うなら住む人もみな社会的とは限らず、また独居の高齢者も多く孤立が懸念された。そうした事情を踏まえながら長沼さんら町内会は、若い親子も参加できる祭りを始めるなど、模索を続けてきた。元々の住民で閑上に戻ったのは三分の一というが、新しい仲間をつくり暮らしたい、懐かしい「うざい街」で過ごしたいと思う人はいるはずだ。

誰も答えられたことのない問い

閉上の現地再建で利便や効率を優先した行政と、安らぎの場を求めた住民、双方の「復興」に対する価値観の不一致。それを象徴するように 20 年 3 月 30 日、山田司郎名取市長は「復興達成宣言」を盛大にアピールしたが、長沼さんは違和感を覚えずにはいられなかったという。「私は、閉上の仲間たちとまた一緒に暮らせるなら、場所はどこでもよかった。それが『復興』だと思っていた。だが、住民はばらばらになり、私の『復興』は消えてしまった」と長沼さんは語った。

「『復興』って何か？ 閉上を訪れた誰に質問しても、今まで納得いく答えをくれた人はいない。私自身も答えを出せないし、出たとして本当に正解なのかわからない。それくらい難しい問題なんだ」

長沼さんが町内会長になって以来、皆で顔を合わせて声を掛け合い、知り合う機会を大切にしてきた。津波で家族を亡くして、閉上に来られなくなってしまった人がいても、決してそのままにせず、声を掛けてきたという。仮に震災がなかったとしても、震災前のような閉上があり続けていたかはわからない。長沼さんが思い描く「復興」を大きな夢として、新たなコミュニティづくり、そして行政や住民と対話をしていくこと、そして閉上の記憶を未来に継承していくことが大切であると考えた。

「復興」の意味を考え、共有する大切さ

私が考えたのは「(復興に) 正解はない」。人それぞれの立場や現状のありようで、その意味は変わっていくということ。行政の立場、現実の被災者、家がなくなった人、大切な人が亡くなった人、それぞれに言葉の意味は違ってくると思う。それが決して悪いことではなく、一人一人が「復興」について考え、それに向かって行動していくことが大切だと思うからだ。だが、それぞれが自分だけの復興を優先してしまうと、価値観の不一致は埋まらないままになる。

大切なのは今ある一つの事実を共有し、一緒に考えること。この記事を読んだ人も、復興という言葉の意味を考えてみてほしい。そして、周りの人と共有して見てほしい。きっと自分にはない考えが見つかるはずだ。

「63年後」の私たちへ 時間とともに失われる「実感」と「危機感」

人文社会学群人文社会学類3年 荻原

1933 年 3 月 3 日の昭和三陸地震の津波で宮城県閉上町(現在の現名取市閉上)は被災した。地元の人々は津波の恐ろしさを後世に伝えるため、「地震が来たら津波の用心」と刻んだ石碑を建てた。が、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災で閉上は犠牲者 750 人余りの津波被災地になった。昭和の津波の教訓はなぜ、78 年後の住民に引き継がれなかったのか。私は、世代間の「実感」の希薄化と「危機感」の喪失について考えた。それから 15 年後の今、この記事を読む人に、震災の記憶の伝達こそが「防災」だという当事者意識を訴えたい。

石碑に刻まれていた 1933 年の昭和三陸地震

宮城県南の海岸部にある閉上は、東日本大震災で初めて津波を経験したのではない。この街は東日本大震災の 78 年前にも、昭和三陸地震の津波で被災していた。

1933 年 3 月 3 日、岩手県釜石市の東方を震源とした昭和三陸地震が発生した。この地震の津波は

1522名の死者と1万2053名の負傷者の被害を出した。閑上で死傷者はなかったが、20軒の家屋の浸水や漁船の被害があった。

旧閑上町は昭和三陸地震を忘れないために、津波の到達地点4カ所に標柱を立て、日和山の下に石碑を建立した。石碑は当時、義援金が寄付される際に出された「一部を記念碑設置に使って欲しい」という要望に応え、地震の詳細と自然災害への心構えを刻んだ。標柱と石碑は共通して「地震あったら津波の用心」という標語を今に伝えている。

では昭和8年の津波は、東日本大震災の以前、どのように捉えられてきたのだろうか。

閑上でなぜ「津波は来ない」と伝えられたか

私は昨年10月に授業で現地を訪ね、閑上中央町内会長の長沼俊幸さん(63)にインタビューした。昭和三陸地震は長沼さんの祖父母の世代の出来事であり、父親は経験しておらず、長沼さんに「閑上に津波は来ない」と教えたという。「牡鹿半島が津波を止めてくれる」とも聞かせたそうだ。長沼さんは日和山の石碑に友達と登って遊んだというが、それが伝える意味を知らなかった。

1933年から2011年までの78年間という時間で、昭和三陸津波を経験した住民は殆どいなくなり、津波への生々しい危機感や実感も失われたのだろう。石碑には「牡鹿半島によって波が遮断された(津波の被害が軽減された)」という文章もあり、そのことも当時の人の無意識の解釈で「牡鹿半島があるから閑上に津波は来ない」と誤って伝えられたのだろう。1960年のチリ地震津波、78年の宮城県沖地震でも、閑上は津波の被災を免れた。二つの地震は「閑上に津波は来ない」という住民の思い込みを助長したとも考えられる。

閑上の現地取材の際、長沼さんは日和山で1枚の写真を見せてくれた。15年前の津波の第一波が名取川河口で撮られたその写真には、逃げようともせずに津波を眺めている人が写っていた。その直後、閑上では約750人余りの住民が犠牲となった。

私たちの考えや対話の伝達が「未来の防災」に

このような「伝達」をめぐる問題は、テクノロジーが発展した今も、新たな危機として起きる可能性が十分にある。

15年前の閑上の津波被災者たちは高齢化が進み、震災の危機感と実感は地元でも少しずつ失われつつある。現地再建事業による新しい街づくりが行われ、若い世代の新住民が増えてきている。コミュニティは震災前と大きく変化しており、新旧住民のつながりを育てようと長沼さんら町内会は苦心している。

新聞やテレビでニュースを見ることなく、自分の欲しい情報をネットで選べる時代にもなった。長沼さんは、新しい住民の中には15年前の震災体験を知らず、「(震災は)もう来ない」と思っている人もいと語った。しかし、私たちの日ごろの考えや対話が無意識に世代間の伝達を生み、未来の人々の「防災」の意識を形づくっていくことを忘れてはならない。

「当事者である」意識を持って

昭和三陸地震が起きた1933年と東日本大震災の2011年には78年間の時間差があった。さらに78年後を考えると、次は2089年になる。2026年の今の私たちからは「63年後」になる。その頃、私たちはどのようなコミュニティやライフスタイルを持っているだろうか。東日本大震災の教訓はどのような知

識や情報となって、誰に伝えられているだろうか。

震災を「知らない」世代が増えている。「知らない」とは経験していないか、無関心であるかだ。だが、これから震災を伝達していこうとする未来の人々は震災を「知らない」世代であり、その人たちへの私たちの行動がさらに先への伝達につながる。今、私たち自身が伝達の責任ある当事者であることを自覚し、未来を見据えて行動してほしい。

住民の心とつながりの変化～津波から15年の閉上

心理・教育学群心理学類3年 石川

2011年3月11日、東日本大震災の津波で全戸が流された宮城県名取市の閉上。今、街には新しい建物が立ち並び、見た目の「復興」は進んだように見える。しかし、昔ながらの住民同士の密なつながりは、今も戻っていないという。何が失われたのか？被災者で閉上中央町内会長の長沼俊幸さん(63)は「街がきれいになっても、心の復興は終わっていない」と語る。何が変わったのか、真の「復興」とは何なのか、考えてみた。

「もう復興はないんです」

津波から15年を迎える閉上では、新しい道路や住宅地が整備され、交流の拠点となる公民館や観光、商業の施設も整えられてきた。現在、地元の観光案内には「かわまちてらす閉上」、ゆりあげ港朝市などが挙げられ、休日にはにぎわっている。昨年10月、授業の現地取材で訪ねた私の目には、若い学生や親子連れの姿も見られ、活気がある街に映った。

ただ、コミュニティがどれだけ育ったかは別問題だ。震災後、市が「現地再建」方針を掲げて行った住民意向調査では、「閉上に戻りたい」と回答した人は最終的に4人に1人の割合¹にとどまり、往時のような住民同士の結びつきが新しい街で再生したとは言いがたい。一方、きれいに整備が進んだ街並みの印象から、閉上が「復興の成功例」として取り上げられることもある。が、この地で津波を経験し、家を再建して帰還した長沼さんは「もう復興はないんです」と語る。

心つながるふるさととは失われ

震災前の閉上は、住民同士の心の距離が近く、互いをよく知る関係性が深い街だったという。当時は「家の鍵は基本的に掛けていなかった」と長沼さん。「近所のおばあちゃんがふらりと家に入ってきて語り出すこともあった」。また、漁師が留守中の家に上がり、獲れた魚を冷蔵庫に入れていく「おまかね」という生活文化があり、長沼さんは「みんながみんなを知っている、安心できる関係だからこそ成立していた」と振り返る。それは一朝一夕に生まれたものではなく、「何十年もかけて築かれたものだった」と話す。

そんな「当たり前」は突然に断ち切られた。住民たちは津波の被災者となって家を失い、避難所生活を余儀なくされた。その後、仮設住宅に移り住んで支え合う月日を過ごした。長沼さんが家族と6年の仮設暮らしを経て帰還した閉上は、市の現地再建事業で嵩上げされ、新しい街が整備された一方で、震災前の暮らしを深く支えていたコミュニティは同じ形に戻らなかった。住民の3分の1が新しい移住者という現在、ふるさととは震災前と別の姿になってしまったからである。

長沼さんが理想としていた復興の姿は、「昔なじみの皆とまた集まって同じ生活が送れること」だった。「もう復興はない」と漏らした言葉の意味は、震災前のコミュニティを取り戻せないことの喪失感だった。

新しい街づくりの努力を続け

長沼さんは現在も、閑上中央町内会長として新しい街づくりのために活動している。神輿が練り歩く祭りの復活、若い家族も楽しめるイベントや、復興アパートで孤立しがちな年配者向けのお茶会…。震災前のような交流、つながりのあるコミュニティを目指しているが、町内会が発足して6年目になる「今でも難しい」と語る。

そんな難しさの背景には、震災前とは前提が異なる現実がある。かつての閑上では、互いを知っている信頼が安心の土台になり、ゆるやかで温かな距離感を形づくっていた。しかし現在は、震災後に新しい仕事や商売、家を求めて移り住んだ住民も多く、生活のリズムや地域との関わり方も様々だ。人が変われば、関係のつくり方も違う。震災前のようなコミュニティを一から築くのには時間が掛かってしまうことは必然である。

インフラ整備が「復興」でなく

復興とは、いつ果たせるものなのだろうか。街並みが整い、新しい施設ができ、行政が「達成」を掲げたとしても、それだけで完了と言い切れるのか。長沼さんの語る「心の復興」は、新造成した街の再建とは別の次元にある。かつての閑上で当たり前だった関係性は、住民の一人ひとりが互いを知る安心感の上に成り立ち、何十年何百年もかけて培われてきた。それが失われたら…。

私自身は、街の形が再び整えられても、それだけでは復興とは言えないと考える。地域のつながりや暮らしの前提となるコミュニティまで含めて再生されてこそ、本当の意味で復興と言えるのではないか。少なくとも「復興達成」を語るのであれば、インフラや住宅の整備完了でなく、住民が安心し、心から楽しんでコミュニティに参加できる土台が整えられたかという視点が重要である、と考えている。

参考・出典

¹ 井宏樹(2013)「『閑上に戻りたい』25%に減少 宮城・名取市調査」『朝日新聞』(2013年5月22日)

http://www.asahi.com/shinsai_fukkou/articles/TKY201305210467.html

(閲覧 2026/1/30)

大津波から15年 名取市閑上で学んだ教訓

人文社会学群人文社会学類2年 洞口

2011年3月11日に起きた東日本大震災。津波で被災した名取市閑上の住民に授業でインタビューをし、当時の状況を語ってもらった。昭和8(1933)年の昭和三陸津波を経験した先人たちが石碑に教訓を残したが、「閑上には絶対に津波が来ない」と誤った話が子や孫の世代に伝わったという。それが750人余りが犠牲になった原因と言われている。閑上の体験から今、私たちは何を学ぶべきだろうか。

津波の教訓が忘れられた大きな代償

昭和8年の津波を経験した先人たちは閑上の日和山に石碑を建て、「地震があったら津波の用心」と教訓を刻んだ。しかし、15年前の震災では消防団の「津波が来るから逃げて」との声を聞いても、津波を眺めていた人がいたという。これは教訓が誤って「閑上には絶対に津波が来ないと子や孫の世代に伝わった」（閑上中央町内会長の長沼俊幸さん）ために、津波というものを理解できずに逃げなかったのだと思う。その痛ましい代償から、東日本大震災を機に多くの人たちが知る遺構となった。

閑上2丁目が一番海に近く、公民館もあった。震災当時は一時避難所になり、50人ほどの住民が避難をしていたという。津波は主に三方向から流れ込み、震災が起きる以前の家々が津波で流され一軒も残っていない。また大勢の住民が犠牲になったことで、かつての町を知ることができなくなった。閑上で新しい街づくりの動きが始まったのは、震災から3年後。かつては釣りを楽しむ親子が多かったというのどかな漁師町は、地元の名取市が現地再建を行った後は「誰も見たこともない街」になった。

想定や予測を超える大災害にどう備える

「津波の高さ予測が低かったから、多くの人が安心して避難しなかった」という声もあった。当時、気象庁が伝えた「津波の高さ」が誤っていたという指摘である。地震直後の初期段階で推定・予測した地震・津波規模が実際と比較して大きく下回ったことがあり、当初の「岩手県3㍎、宮城県6㍎、福島県3㍎」という警報が問題視された。このため気象庁は「東北地方太平洋沖地震による津波被害を踏まえた津波警報改善に向けた勉強会」や「津波警報の発表基準等と情報文のあり方に関する検討会」を行い、また「津波警報の発表基準等と情報文のあり方に関する提言」をまとめ、それ以降、予想される津波の高さは「巨大」「高い」などと表して数値では伝えないこととなった。

これらの教訓を踏まえ「防災」を考えてみると、それは災害の被害の可能性を想定し、態勢を備えることに他ならない。まず、ハザードマップに記載されている浸水想定である。想定を踏まえて避難すれば助かるという前提で、その場所に行って避難を誘導したり、呼び掛けたりすることは、今までの知見からは当然のことだった。しかし、東日本大震災では想定以上に低頻度大規模災害が起きてしまったため、「想定」が裏目に出たことになる。「ハザードマップ上では浸水しないから安心していいというのではない」と、多くの人にハザードマップの意味を正確に伝えていかなくてはいけないと思う。

被災地を訪ね生きた情報を学ぼう

私は、東日本大震災が起きた時は幼稚園で過ごしていた。あまり記憶はないが、園児みんなて校庭に逃げたことは覚えている。それから少しずつ、学校の授業で東日本大震災について学ぶ機会が増えた。東日本大震災を経験していない人たちが年々生まれてくる。この出来事を実際に閑上のような被災地を訪ね、津波で何があったのか、生きた情報を学ぶことが必要である。いつ来るか分からない災害の対策を知っておかねばならない。

閉上の被災者の後悔から学ぶ「情報」の重要性

心理・教育学群心理学類2年 三宅

2011年3月11日、東日本大震災の津波が名取市閉上を襲い、多くの被災者が口にした「大地震の後に津波が来ると知っていれば…」という重い後悔。生死を分けた避難行動だけでなく、その後の生活再建においても、情報は受けられる支援の質と量を劇的に変える「見えないライフライン」だ。知ることが暮らしを守る最大の武器であることを、過去の教訓から紐解き、未来への備えを考える。

残酷なスタートラインの差

被災直後の混乱の中、同じように家を流され、同じ避難所にいながら、その後の再建スピードには残酷なほど明確な差が生じていた。その差を生んだ正体こそが「制度を知っていたか、否か」だ。

行政からの情報は避難所の壁に貼られる「紙」が全てだった。情報を自ら取りに行き、民間賃貸住宅を行政が借り上げる「みなし仮設」の制度をいち早く知った家族は、プライバシーのある生活へ早期に移行できた。一方で、その情報を知らなかった、あるいは理解できなかった人々は、寒さと喧騒の続く体育館での生活を余儀なくされた。情報は、被災直後のQOL(生活の質)を決定的に分けたのである。

「知らなかった」ことの代償

被災者への取材で何度も耳にしたのは、「もっと早く情報を知っていれば」という悔恨の言葉だ。

特に深刻だったのが「罹災証明書」にまつわる後悔だ。家の被害認定(全壊・大規模半壊など)が支援金の額を左右するが、「判定に不服があれば再調査を依頼できる」という権利を知らず、最初の判定を諦めて受け入れてしまった人がいた。

「知っていれば再調査を頼んで、もっと手厚い支援を受けられたかもしれない」

生活再建の資金が数百万円単位で変わる制度がありながら、周知が徹底されなかったことによる「知らなかったことの代償」は、その後の被災者の心と暮らしに重くのしかかった。

情報は「与えられるもの」ではない

なぜ、このような情報格差が生まれたのか。それは私たちが平時において、情報は「行政が公平に教えてくれるもの」と信じ込んでいたからではないか。

しかし、未曾有の災害時において行政機能は麻痺する。被災者一人一人に手取り足取り教えてくれる余裕などなくなってしまう。「待っていれば誰かがー」という受け身の姿勢は、緊急時には命や生活を守る機会を逸することと同義になる。

閉上の教訓が突きつけるのは、情報は単なるお知らせではなく、自ら掴みに行かなければ効果を発揮しない「生存のための武器」であるという現実だ。

知識という備えを

災害への備えといえば、水や食料の備蓄ばかりに目が向きがちだ。しかし、閉上の被災者が直面した後悔は、頭の中にも「知識の備蓄」が必要であることを教えてくれている。

「情報は待つものではなく、取りに行くもの」

この教訓を胸に、平時から自治体の広報に目を通し、どんな支援制度があるのかを知っておくこと。そして、いざという時に情報と助けを共有しうる地域との繋がりを持っておくこと。それこそが、次の災害で自分と家族の暮らしを守る、最強の防災となるはずだ。

震災から15年 閉上で「復興」は成し遂げられたか

健康栄養学群健康栄養学類2年 大友

東日本大震災から15年。被災地となった名取市閉上は、「かわまちてらす閉上」など商業施設や新しい住宅地が整備されるなど劇的に発展し、移住する人も増え、見た目には「復興」は成し遂げられたかのようだ。が、住民のうち「現地再建」の街に戻ることを選んだ住民は1000人にも満たなかったという。当事者の一人、閉上中央町内会長の長沼俊幸さん(63)から、今の閉上の街、失われた昔の閉上、今後の閉上のまちづくりの話聞いた。本当の「復興」とはどういうものなのか、考えてみたい。

市がこだわった現地再建、離れた住民

2011年3月11日、高さ最大約9mもの大津波が閉上の街を襲った。閉上での犠牲者は753名に上る(被災前の地区人口からの比較で約14%の人が亡くなった)。東北各地の被災地では、高台移転など地域に応じた新しい街づくり手法が採られたが、名取市が推し進めたのは、閉上の街の「現地再建」を行うという選択であった。

当初、避難中の住民の大半は、悲惨な被災体験から二度と津波が来ない内陸への移転を希望した。市が行った意向調査では、現地再建ではなく内陸移転へのを望む人が8割近くもいた。しかし、市が優先したのは全体で見ても数が少ない水産業の声や、閉上という歴史ある土地の存続であった。

このような市の方針について、長沼さんは「市は新しい街づくりを急ごうとしたのではないかと推測しており、結果として住民の意見が反映されていない街づくりが行われてしまったのではないかと語った。

避難生活の苦しさ、復興達成宣言の違和感

「避難所の生活は辛いことが多かった」。昨年10月、授業で訪ねた閉上中央集会所での取材に長沼さんは話した。一番問題になったことはプライバシーの確保だった。ダンボールで家族ごとに仕切るという最低限のプライバシーの確保さえ3カ月近くもなく、長沼さんらが世話役の市職員に交渉してやっと設置された。その後も、子どもがいる家族には狭く不便な仮設住宅に6年も住まなくてはならなかった。離れがたい理由が長沼さんにはあったからだ。

長沼さんの高齢の両親が、顔見知りもない知らない所で生活したくなかったという事情からだ。それゆえ年々仮設住宅から退去してゆく人が増えても、昔なじみがある仮設での暮らしを続けたという。津波で古い漁師町が失われた後、高さ5メートルの盛り土で造成された閉上に自宅を新築し、家族で移ったのは17年7月だった。

その3年後の20年3月30日。名取市の山田司郎市長は、閉上の「現地再建」が完了したとする『復興達成宣言』を発表した。当時は道路も未完成の状態で、長沼さんは「とてつもない違和感を持った」という。それは長沼さんが昔の閉上を愛していた故でもあった。

これからの閉上、本当の「復興」とは

「年月が経つにつれ、寂しさが増してゆく」と長沼さんは語った。自分が生まれ育った昔の閉上の面影が、新しい住宅や施設が立ち並ぶ閉上には見られなくなってしまったからだという。長沼さんが愛した震災前の住民同士のつながりが、この街では取り戻せていないのだ。見違えるほど綺麗になった街で、帰還した旧住民と移住してきた若い家族ら新住民のコミュニティーづくりに町内会の苦心は続いている。

今の閉上に足りないものは何であろうか。「『うざい』ほどの人と人とのつながり」であると長沼さんは話す。震災前の閉上の良さについて、長沼さんはたくさん語ってくれた。昔の閉上で暮らした人々は、互いが互いの家のことを知り尽くし、それが住民同士の信頼、深い絆になっていたようだ。長沼さんの閉上の思い出には、玄関に鍵を掛けたことがない、留守宅の冷蔵庫に漁のおすそ分けを入れていく—など、今ではありえないような話が盛りだくさんであった。

そんな良い関係が今の閉上には育っていないという。なぜだろうか。それは昔ながらの住民の多くは離散したからだ。ふるさとが別の街に変わってしまったことに、長沼さんは悲しい思いを抱いていた。それも「復興」という言葉への疑問になった。

形にない大切なものと生きる街を

「これからこの閉上はどうなってほしいか」という問いに、長沼さんは「戻ってよかったと思われる街」、「こっちの方がいいと言われるような街」になってほしいと語った。そんな街をつくっていくには、市が急いだ現地再建の過程で希望を無視された人たち、そして新旧の住民たちの意見が生かされた交流の街をつくること。それが達成された時、長沼さんが求めてきた「人と人とのつながりが深い昔の閉上」の温もりある街、帰りたくなる街、そして寂しさが癒される街が復興するのだろう、と私は強く思う。

この記事を読んでもくれた人へ伝えたいのとは、街がきれいになることや、新しい観光施設ができるなどの「形で見える目標」を達成することが復興なのではない、ということだ。長沼さんが語る「人と人とのつながり」など、形に見えない大切なものをよみがえらせていくことが「復興」の道なのである。それは形に見えるもの、見えないものをバランスよく、元の状態までつくり直すこと—。長沼さんら町内会の模索はまだ途上だが、それこそが本当の「復興」ではないか。震災から 15 年の今、読んでくださった人にも考えてみてほしいと願う。